

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

メディアの言語における強調的表現

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): 映像メディア, ニュース, 分裂文, 要点の後置 キーワード (En): 作成者: 轟, 里香 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00008070

メディアの言語における強調的表現

轟 里 香

要 旨

本稿では、映像メディア、特にニュースの言語における分裂文の出現という現象を取り上げ、近年映像メディアにおいて分裂文が多用されていることを指摘し、その使用の目的及び背景にある要因について考察する。分裂文は、学校文法等で強調構文と呼ばれることが多く、ある要素を強調するために用いられる構文である。一方、日本語においては、日本語の言語的特性上、この構文を使うことによって、重要な要素が後に回される（「要点の後置」）ことになる。本稿では、映像メディアにおいてこの構文が使用される主要な目的が、要点の後置であるということを主張する。この主張の根拠として、今日のメディアにおいて、重要な要素をできるだけ後に回そうとする強い傾向があることを指摘する。そして、分裂文が多用されるということが、この傾向に基づくものであり、したがって、分裂文の使用による要点の後置は、意図された結果であるということを主張する。

キーワード：映像メディア、ニュース、分裂文、要点の後置

1. 導入

本稿では、映像メディア、特にニュースの言語における分裂文の出現という現象を取り上げ、近年映像メディアにおいて分裂文が多用されていることを指摘し、その使用の目的及び背景にある要因について考察する。

この構文は、学校文法等で強調構文と呼ばれることが多い。すなわち、ある要素を強調するために用いられる構文である。しかし、分裂文が用いられる効果は、これだけではない。

本稿では、分裂文を用いることに、強調以外の効果があることを指摘する。日本語においては、日本語の言語的特性上、この構文を使うことによって、重要な要素が後に回されることになる。本稿では、映像メディアにおいてこの構文が使用される主な目的が、重要な要素を後に回すことであると主張する。すなわち、ある要素を強調するために用いる構文が、偶然他の効果を生んだというわけではなく、それを意図してこの構文が用いられているということである。この主張の根拠として、今日のメディアにおいて、重要な要素をできるだけ後に回そうとする傾向があることを指摘する。分裂文が多用されるということは、この傾向と軌を一にするもの

であり、したがって、分裂文の使用により重要な要素が後に回されることは、意図された結果であるということになる。

本稿で扱うニュースは、NHK で放送されたものである。NHK のニュース番組は、一般的に代表的なニュース番組とみなされ、そこで使用される言語は、公式の場で使われる言語表現の典型とみなされることもある。したがって、そこでの言語変化は、考察する価値のあるものであると言える。

本稿の構成は、次のようなものである。2 節では、「分裂文」についての説明を行い、その一般的な目的について述べる。3 節では、テレビニュースなどにおいて、分裂文が出現する例を見る。4 節では、本稿で用いるデータに関し、過去の映像メディアのデータのアクセス可能性の現状について述べる。5 節では、過去の映像メディアにおける分裂文の出現例を示す。6 節では、分裂文を用いることの効果として、要点を後ろに移動することができるということを描き出し、これが分裂文を用いることの主要な目的になっていると主張する。このことの根拠として、7 節では、要点を後ろに置く強い傾向がニュースにおいて存在することを示す。8 節では、なぜそのような傾向が存在するのか、その要因として、ニュース番組の娯楽番組化があることを指摘する。9 節では本稿の議論のまとめを行う。

2. 分裂文

この節では、「分裂文」とはどのような構文か、また、その一般的な目的について述べる。

分裂文とは、学校文法等で強調構文と呼ばれる構文で、(1) のようなものである。

(1) a. 太郎が最近興味を持っているのは、パソコン通信だ。

b. It was perfume that Mary bought in France.

(高見 1999: 146)

高見 (1999) によれば、これらの文では、下線部の位置が焦点要素、すなわち話し手が最も伝達したい部分で、通例文強勢 (アクセント) が置かれる。これは、焦点が文のどの要素であるかを示すことができる構文である。すなわち、分裂文を用いる話し手は、文のいずれかの要素を強調する目的でこの構文を使うということになる。これがこの構文の主要な目的であることは、この構文が一般的に「強調構文」と呼ばれていることにも示されている。

このような構文が、日常会話で出現するのはまれであるように思われる。すなわち、目的をもって意図的に作る有標の構文であると言える。ある要素を強調するというのは通常その主要な目的である。

3. 映像メディアにおける分裂文の出現

このような分裂文が、テレビニュースなどの映像メディアにおいて出現する例が見られる。轟（2014b: 41）によれば、次の例文はそれぞれ下線部を強調する分裂文の形を取っている¹⁾。

- (2) a. 4081チームの頂点に立ったのは、佐賀北高校でした。
(「おはよう日本」NHK、2007年8月23日放送)
- b. 第31回オリンピックの開催地に決まったのは、リオデジャネイロでした。
(「おはよう日本」NHK、2009年10月3日放送)
- c. この決定で大きな打撃を受けるのが、肉を扱う業界団体。
(「ニュースウォッチ9」NHK、2012年6月12日放送)
- d. 逮捕の決め手になったのは、防犯カメラなどの画像です。
(「ニュース7」NHK、2012年12月1日放送)

このようなニュースにおける分裂文の使用例は、従来からあったものなのであろうか。それとも、ある時期に出現したものなのであろうか。これを調べるためには、過去のデータを調べる必要がある。しかし、過去の映像メディアのデータにアクセスすることは、現在非常に困難な状況である。次節では、このことについて述べる。

4. 過去の映像メディアのデータ

過去の映像メディアにおける言語表現の研究には、過去に放送された映像メディアの記録が不可欠である。しかし、そのような記録にアクセスするのは非常に難しい。

同じメディアでも、文字によるもの、たとえば新聞の場合は、過去の新聞の縮刷版や、電子的データベースが存在する。したがって、過去に用いられた言語表現のデータを得ることが容易にできる。

一方、テレビの場合は、放送されるものは一時的で流れて行ってしまふ。したがって、録画していない限り、放送されたものを後日確認するのが難しいという状況がずっと続いてきた。これは現在もあまり変わっていない。確かに、インターネットが普及した現在では、テレビで放送された後でも番組を見る方法があるにはある。(TVer、など。)しかし、テレビの放送後オンラインで提供されているようなものは、視聴可能な番組や見られる期間が限られており、データベースというような種類のものではない。体系的にデータベース化されアクセスが可能になっている過去の放送、すなわち、映像アーカイブの必要性が、かなり以前から指摘されて

いる。小林（2009: 5-6）は次のように述べている。「……テレビ番組をアーカイブ化すること、すなわち、いったん放送されたテレビ番組を公共の記録として保存し、アクセスの可能性、参与の可能性、共有可能性を保証していくことは、放送の公共性の重要な部分を占めているといえるだろう。」しかし、現状は、依然として、テレビは基本的に検証しにくい、または検証を拒むメディアである、という状況である。（中（2008: 26））

このような状況において、NHKは「NHK アーカイブス」という制度を設けている。NHK アーカイブスとは、次のようなものである。

ラジオ放送開始からおよそ90年、テレビ放送開始から60年余りの間に作られた番組や台本、番組にかかわる記録、番組を作るための素材、さらにデータベースなどその保管の仕組みや埼玉県川口市にある保管施設などを総称して、NHKアーカイブスと呼んでいます。

（「NHK アーカイブスとは」<https://www.nhk.or.jp/archives/about/>、2022年10月15日アクセス）

これは、テレビ番組が体系的にデータベース化されたものと言えよう。アクセス可能性については、「NHK アーカイブス」に保管されている番組の中には、NHKの各放送局で公開されているものもある。しかし、すべてが公開されているわけではない。

このNHKアーカイブスの学術利用として、「学術利用トライアル」が実施されている。これは2010年より行われているもので、NHKアーカイブスで保存されている番組を学術的に利用する方法を検討するプロジェクトである。公募で採択された研究者が、東京のNHK放送博物館、川口・NHKアーカイブス、NHK大阪拠点放送局の研究閲覧室で、研究テーマに沿った番組を選んで閲覧し、研究成果につなげていくというものである。（「NHK アーカイブス学術利用トライアル」<https://www.nhk.or.jp/archives/academic/index.html>、2022年10月15日アクセス）

本稿の筆者は、2011年度NHKアーカイブス・トライアル研究員に選ばれた際、限られた期間ながらニュース番組のデータ収集を行って、ニュース番組のデータ活用を試行した。本稿で用いるデータは、その際に得られたデータ（1995年から2007年まで）、および、筆者が録画したものである²⁾。

このようなデータをもとに、次節では、分裂文のテレビニュースでの使用に関し、過去の映像メディアにおける分裂文の出現の例を見る。そして、分裂文が用いられることは、ずっとあったわけではなく、ある時期から行われるようになったものであることを指摘する。

なお、ニュースを放送するプログラムを指して「ニュース番組」という表現が一般的に使われているが、NHKの分類では、放送するプログラム全体を、「ニュース」とそれ以外のプログラムである「番組」に二分している。つまり、「ニュース」以外のプログラムが「番組」である。

このため、公式には「ニュース番組」という表現はないことになるが、本稿では、「番組」という語を「テレビで放送されるプログラム」という一般的な意味で用い、ニュースを扱っているプログラムを「ニュース番組」と呼ぶことにする。

5. 過去の映像メディアにおける分裂文の出現

筆者が確認したテレビニュースのもっとも古いデータは、「ニュースセンター9時」（1974年4月1日放送、放送時間40分間）である。この番組では、分裂文の出現回数は0回であった。そのくらいの時期のニュースで確認できるデータは非常に少ないので、当時分裂文の出現が全くなかったとは断言できないが、少なくとも、頻繁に出現するようなものではなかったことは分かる。

これに対し1995年の番組では、次のような例の出現が確認できる。

- (3) 注目されるのは、全仏オープンベスト4入りで第6シードにランクされた世界ランキング6位の伊達君子選手です。

（「ニュース7」NHK、1995年6月26日放送）

（轟2015: 41）

それ以降、1995年から2007年までのデータでは、分裂文の出現数はそれほど多くはなく、散発的であった。

しかし、それから5年後の「ニュースウォッチ9」（2012年6月12日放送、放送時間60分間）では、分裂文が非常に多く出現している。（出現回数11回。スポーツ関係のニュースでの出現回数を除く³⁾。）このことから、分裂文の使用は、2008年以降のかなり短い期間に急激に増加したものと見られる。

2022年現在、分裂文はニュースに頻繁に出現している。

- (4) 二人が知り合ったのは、SNSでした。

（「ニュース7」NHK、2022年10月17日放送）

- (5) 今回の中国共産党大会で、習近平国家主席が改めて強調したのは、（映像と音声）台湾統一の方針です。

（「ニュースウォッチ9」NHK、2022年10月17日放送⁴⁾）

- (6) こちら飛んでいるのは、北海道の北部に冬の訪れを告げる渡り鳥コハクチョウです。

（「ニュースウォッチ9」NHK、2022年10月17日放送）

このように、ニュースで分裂文が用いられるのは2022年現在普通のようにになっている。

なお、(4) — (6) は同じ日の別々のニュース番組であるが、放送時間の長さを考慮しても「ニュースウォッチ9」のほうが多く分裂文が出現している。その理由としてどのようなことが考えられるのかは、8節で述べる。

6. 分裂文が使用されることの効果

本稿では、分裂文がテレビニュースでなぜ使用されるのか、その目的を考察するが、そのために、まず、分裂文が使用されることの効果についてみてみよう。

先に述べたように、分裂文は、焦点が文のどの要素であるかを示すことができる構文である。この構文を使うことによって、話し手は、文のいずれかの要素を強調することができる。

しかし、分裂文が使用されることの効果はこれだけではない。日本語の言語的特性により、分裂文の使用は、要点を後ろに移動させるという効果を生む。分裂文がどのようにこれを可能にするかを見てみよう。

(7) (=1)

a. 太郎が最近興味を持っているのは、パソコン通信だ。

b. It was perfume that Mary bought in France.

(8) 太郎は最近パソコン通信に興味を持っている。

一般的に、分裂文を用いる主要な目的は、特定の要素を強調することである。しかし、分裂文を用いることの効果は、それだけではないことが、(7a) と (7b) および (8) とを比較することによって分かる。(7a,b) で焦点要素（強調したい部分）の現れる位置を見ると、同じ「分裂文」と呼ばれる構文でも、日本語と英語では焦点要素の現れる位置が異なっている。英語では比較的前のほうに焦点要素が置かれるのに対し、日本語の分裂文では、焦点要素が文の最後に近い位置に置かれる。(7a) と分裂文ではない (8) で下線部の位置を比べてみると、分裂文では下線部が後ろに動かされることが分かる。分裂文の焦点要素は、話し手が最も伝えたい部分であるから、文の要点であると言える。したがって、日本語で分裂文を用いると、要点を後ろに移動することになる。

この、分裂文の効果として要点が後ろに動かされるということは、偶然の産物なのか、それとも意図された効果なのだろうか。言い換えると、強調を目的として用いた分裂文の使用が、たまたま要点を動かすということになるのだろうか。本稿では、要点を後ろに動かすというこの効果を意図して分裂文が使われている、しかもそれを主要な目的として使われているという

ことを主張する。その根拠として、テレビニュースにおいて、要点を後ろに動かそうとする明らかな傾向が見られることが挙げられる。次節では、その点について述べる。(これ以降では、要点を後ろに置くまたは動かすことを「要点の後置」または「要点後置」と呼ぶことにする。)

7. ニュースにおける要点の後置の傾向

7.1 談話の構造としての要点の後置

ニュースにおける要点の後置の傾向を示す言語表現はいろいろあるが、最も分かりやすいのは、テキストとして重要な要素をできるだけ後に回そうとすることである。

- (9) 700万円払った部下もいました。神奈川県警察本部の警視が関与した疑いが出ている靈感商法事件で、この警視は、部下の警察官を靈感商法が行われていたサロンに勧誘したり、投資話を持ちかけて金を集めていたことがわかりました。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2007年12月21日放送)

(轟 2009: 105-106)

このような例では、冒頭の文で、いわゆる5W1Hに属するような情報が省略されている。それにとどまらず、文で必須とされる要素が冒頭で省略される場合もある。(9)はそのような例であり、冒頭の文が非常に違和感のあるものとなっている。このような例が現在ごく普通のように出現している。

過去のデータを調べると、談話としての要点の後置は、かなり古くから出現例が見られる。そのような例では、(9)のような冒頭の一文での必須要素の省略はないものの、談話の要点がかなり後にならないと述べられない(いわゆる前置きが長く何が言いたいのかなかなか分からない話の)ようになっている。

- (10) さて今日から新しい年度が始まります。ちょっとこれをご覧ください。これは今日から各銀行が一齐に売り出しました宝くじ付きの定期預金です。でまあ、思わず手に入る百両と、これは春から縁起がいいわいと言いたいところなんですけれども、一千万円に当たる確率というのは実に30万分の1ということなんですけれども、それでも出足はなかなか好調のようでした。この辺にもインフレに苦しむ国民のささやかないわば夢が秘められているという気がいたします。狂乱物価とか物価の鬼とか呼ばれておりますインフレは、今日の年度替りで一体正気づくのか、それともかえって加速していくのか、ここらへんの物価と暮らしの関わり合いについて、経済部の大山記者に東京都内を実感的なりポー

トをしてもらいました。

(「ニュースセンター 9 時」NHK、1974年 4 月 1 日放送)

(轟 2015: 47-48)

(10) は、あるニュース項目の冒頭に述べられたものであるが、このニュース項目が何についてのものなのかを示しているのは下線部である。この下線部は、かなり後にならないと出てこない。このように、談話の構造として要点が後置されることは、1970年代にはすでにニュースにおいて出現していることが分かる。

この番組「ニュースセンター 9 時」が放送開始時にどのような番組として始まったものなのかは、この番組の特徴を示している。「ニュースセンター 9 時」は、当時としては画期的なニュース番組として登場したものであった。従来、ニュース報道においては、重要な点をはじめに述べる（重点先行）ということが原則とされている⁵⁾。一方、「ニュースセンター 9 時」では、重要な点をはじめに述べずかなり後になって述べる (10) のような例が生じている。この番組が画期的なニュース番組として始まっていることから、談話としての要点の後置はそれ以前のニュースでは用いられておらず、この番組で画期的な手法の一つとして用いられたということが推測できる。

このように、1970年代に要点が後置されるような構造がニュースで出現しているデータがある。上に述べたように、これが用いられた始めたのは当時画期的とされたニュース番組ではないかと考えられるが、興味深いことに、この背後にある考え方は、斬新というよりむしろ日本において伝統的なものである。木下 (1990) は、日本語で伝統的に良い文章とされるものの特性について述べている。木下によれば、文章の構成には「重点先行」と「起承転結」がある。文学作品には「起承転結」が向いているが、「報告・説明の文章や、ある考えを主張するのが目的の文章では、真っ先に大事なポイント（要点）を書く—重点先行で書く—ことが情報化時代の要請である」（木下 1990: 119）。しかし、日本の作文教育では、伝統的に、「起承転結」の構成を取る文章が良い文章であるとする傾向があった⁶⁾。

ニュースの文章は、文学作品ではなく、「報告・説明の文章」にあたるであろう。しかし、日本語で伝統的に「起承転結」が良い文章とされる、という傾向の影響を受け、かなり古くから (10) のような例が出現したとみられる。初めは、談話の構造としての要点後置であったものが、さらに進み、冒頭の文で言語的違和感を生じるほどの省略をするという状況（例文 (9) など）につながったと考えられる。

このように、要点の後置の傾向が、現在のニュースで非常に強くみられる。したがって、分裂文の使用にも、この傾向が影響していると言える。すなわち、分裂文の主要な効果である、ある要素を強調することだけでなく、要点を後置するという効果についても、意図的に用い

られていると結論する十分な根拠がある。そして、要点の後置の強い傾向が見られることを考えると、分裂文の二つの効果のうち、要点を後置するという効果のほうを主要な目的としていると結論することができる。

7.2 言語表現としての要点の後置

要点を後置するという効果を意図して分裂文が用いられていることを示すものとして、同じ効果を持つ他の言語表現の使用が挙げられる。これには、多くの種類がある⁷⁾が、そのうちのひとつとして、「文の代わりに使用される名詞句」を見てみよう。これは、次のような例である。

(11) 吸引すると興奮作用があり、幻覚や幻聴の症状が出ることもある脱法ハーブ。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2012年6月12日放送)

(轟 2014b: 35)

(12) 脱法ハーブは、吸引すると興奮作用があり、幻覚や幻聴の症状が出ることもある。

(13) ザ・ドリフターズの一員として、昭和40年代から、民放の番組「8時だヨ！全員集合」などに出演、国民的人気を集めた仲本さん。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2022年10月18日放送)

(14) a. 間もなく8か月となるロシアのウクライナ侵略。

b. 犠牲者を追悼するウクライナの市民。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2022年10月18日放送)

(11) は、(12) のような文の代わりに、修飾語句がついた名詞句が用いられており、結果として、いわゆる「体言止め」となる。(ここからは、このような例を「体言止め」と呼ぶことにする。)

体言止めを使うことの効果は、一般的には語調などが考えられるが、それに加え、日本語の言語的特性として、英語などとは異なる効果がある。日本語は、句の主要部が句の末端に来る言語である。したがって、名詞句においても、名詞が句の末端に来ることになる。名詞は語彙的要素であり、要点である場合が多い。つまり、修飾語句を伴う名詞句を文の代わりに用いると、名詞が後ろに動かされ、結果として要点が後置されることになる。

上に挙げた体言止めの例の中で、特に(11)の例に注目できる。これは、このニュース項目の冒頭で出現したものであり、何についてのニュースなのかを視聴者に分からない段階で述べられたものである。したがって、以下の(15)に示したように、下線部が出てくるまで、何についてのニュースなのかを視聴者に明らかにされないことになる。すなわち、下線部は、この話が何についてのニュースなのかを示す重要な要素であると言える。

(15) 吸引すると興奮作用があり、幻覚や幻聴の症状が出ることもある脱法ハーブ。

(16) 脱法ハーブは、吸引すると興奮作用があり、幻覚や幻聴の症状が出ることもある。

(15) と (16) を比較すると、要点である下線部が体言止めを使うことによって後置されることが分かる。この体言止めの効果は、分裂文の使用の場合と非常によく似ている。

(17) (=7a) 太郎が最近興味を持っているのは、パソコン通信だ。

(18) (=8) 太郎は最近パソコン通信に興味を持っている。

体言止めも分裂文も、共に要点を後置する効果があることが分かる。

このように、談話だけでなく、個々の言語表現に関して見ても、要点を後置するという同じ効果を持つ表現が使われている。このことは、現在のニュースにおいて、要点の後置が強い傾向であり、分裂文もそれに従って用いられていることを示していると言える。

8. なぜ要点を後置するのか

この節では、ニュースにおいて要点後置の強い傾向を引き起こしている要因について見る。

上に述べたように、日本の作文教育における「起承転結」の構成を取る文章が良い文章であるとする傾向は、要点の後置が好まれる大きな要因と考えられる。これに加え、ニュースにおいて要点後置の強い傾向を引き起こしている要因として、ニュースの娯楽番組化が挙げられる。

娯楽番組においては、要点を後置することが頻繁に行われている。典型的なのは、クイズ番組であろう。そのような番組では、最も伝えたい情報を、クイズの答えという形式で、後で述べることが行われる。このような形式は、番組全体がクイズ番組の場合に限られるものではない。多くのジャンルの番組で、部分的にこの形式が取られているのが観察される。

ドラマなどのフィクションでも、要点後置の手法がしばしば用いられる。重要な要素を視聴者から隠し、話が進むにしたがってそれが徐々に明らかになる、というストーリー展開は珍しいものではない。推理ドラマはその典型であるが、他の内容のドラマでも、重要な要素を後で明らかにするという形式が取られる。ドラマの場合は、この形式を楽しむ、という側面が大きい。ドラマは、文字言語で言えば文学作品に対応する、すなわち起承転結という文章の構成を取るものと言える。

ニュースにおいて要点後置の傾向が強まった要因として、上に述べた娯楽番組の影響を指摘することができる。ニュース番組が娯楽番組に類似した手法を取ることが、要点後置の傾向につながっていると考えられる。このことを示すものとして、(10) の例からわかるように、

1970年代に画期的なニュース番組として登場した「ニュースセンター9時」において、談話としての要点後置が出現していることが挙げられる。このニュース番組について、次のように述べられている。「夜9時から40分間の、当時としては大型の報道番組として、娯楽中心だったゴールデンタイムに割って入る大胆な構成であった。」（加藤 2012: 102、下線は筆者）このように、「ニュースセンター9時」は娯楽番組の多い夜9時の時間帯に、大型の報道番組として始まったものであり、従来のニュース番組とは異なる特徴を持つことを前面に押し出したものであった。その特徴の一つが、(10) のような談話としての要点後置であったと考えられる。

要点後置の傾向が多くのニュース番組で見られるようになった現在でも、夜9時台のニュース番組は特にその傾向が強い。このことに関係したものとして、5節で述べたように、9時台のニュースで分裂文の出現が多いことを挙げるができる。娯楽番組の多い夜9時台のニュースが特に娯楽番組に類似した手法を取ることが多く、現在も、要点後置の傾向が強い。よって、要点後置を目的として、分裂文を多く用いていると考えられる。

補足として、文字言語と音声言語の間の興味深い対応関係について指摘しておきたい。上に述べたように、木下（1990）によれば、文章の構成には「重点先行」と「起承転結」があり、文学作品には「起承転結」が向いているが、「報告・説明の文章」などでは、「重点先行で書く」ことが原則である。（木下 1990: 119）。しかし、日本の作文教育では、伝統的に、「起承転結」の構成を取る文章が良い文章であるとする傾向があった。すなわち、文学作品の文章構成が「報告・説明の文章」などの文章構成に影響を与えるということになる。一方、テレビニュースの音声言語では、その文章構成がドラマなどに類似したものとなる傾向がある。ここには、表1が示すような対応関係がある。

表1

文字言語	音声言語
原則的な構成	
文学作品－起承転結	ドラマなど（娯楽番組）－起承転結
「報告・説明の文章」－重点先行	ニュース－重点先行
実際の傾向	
「報告・説明の文章」－（文学作品の文章構成の影響を受け）起承転結型が見られる	ニュース－（ドラマなど（娯楽番組）の構成の影響を受け）起承転結型が見られる

ドラマなどの娯楽番組は文学作品、ニュースが「報告・説明の文章」に対応するものと見なせる。そして、文学作品の文章構成が「報告・説明の文章」に影響するという関係も、ドラマなどの娯楽番組の構成がニュースの構成に影響する、という関係に対応していることが分かる⁸⁾。

9. 結論

本稿では、映像メディアの言語における分裂文の出現という現象を取り上げ、近年映像メディアにおいて分裂文が多用されていることを指摘し、その主要な目的と背景にある要因について考察した。

分裂文を用いることによって、文中のある要素を強調することができるが、日本語においては、言語的特性上、この構文を使うことによって、重要な要素が後置されることになる。本稿では、後者の効果を意図してこの構文が用いられていることを主張し、今日のメディアにおける、重要な要素をできるだけ後に回そうとする傾向が背景にあることを指摘した。分裂文を用いることによる要点後置の効果は意図的に用いられており、これが主要な目的となっていると言える。なぜなら、テキストとしてみても、重要な要素をできるだけ後に回そうとする傾向が顕著であるからである。それに加え、要点の後置の効果を持つ他の言語表現の使用も顕著であるということも挙げられる。

近年、言語の変化が急速に進んでいる。映像メディアで使用される言語においても、非常に短期間のうちに急激な変化が生じている⁹⁾。したがって、本稿で指摘した言語現象に関しても、今後さらに拡大していくのかどうか、継続的な観察が必要である。

註

- 1) 本稿のデータで音声言語を文字化したものは、筆者の判断で文字化したものであるが、画面上に対応する文字が出ていた場合は、それを参考にして文字化している。
- 2) 2011年当時は、学術トライアルで閲覧できるものにニュースが含まれていたが、2022年現在は対象外になっている。
- 3) スポーツ関係のニュースは、従来からその他のニュースとは異なる言語表現が用いられてきたが、ここでの言語表現がその他のニュースに拡大する傾向がみられる。このことに関する議論については、轟 (2012, 2014b) を参照されたい。
- 4) (5) では、分裂文の途中で映像と音声が入挿されている。このように、音声言語と映像を組み合わせることがニュースでしばしば行われる。(5) は映像を除いても言語表現として成り立つが、中には、音声言語が必須要素を欠いており、その欠けた部分を映像で補うという手法がとられる場合もある。(轟 2014a: 88) このような手法は、映像の存在がなければ成り立たない。轟 (2008) は、テレビニュースとラジオニュースを比較して、テレビニュースの手法の多くが映像の存在を前提としていることを指摘している。
- 5) 一例として、日本語の新聞記事を英語に翻訳する際の注意点について論じている根岸 (1999) は、最も

重要な要素をアタマに置かなければならないと述べている（根岸 1999: 308）。

- 6) 本稿の筆者がこれまでに卒業研究論文を指導した中で、論文の結論を最初に述べず最後まで言いたいことを伏せておくような構成案を学生が考えていた、という事例がある。言うまでもなく、論文の構成としては適切ではないが、本人は結論を最後まで隠しておくのが良い構成案だと考えていたようであった。これも、「起承転結」の構成を取る文章が良い文章であると考え、という傾向を示すものと言えよう。
- 7) 要点を後置するその他の言語表現に関する議論については、轟（2007, 2014b）を参照されたい。
- 8) 要点の後置以外に、ニュース番組が娯楽番組的な手法を取る例として、音楽の使用が挙げられる。小泉（1998: 39）が指摘するように、日本のニュース番組では音楽が多用される。すなわち、ニュースが述べられる背後で、音楽が流される。この傾向はますます強まっている。音楽の使用は、ドラマなどの娯楽番組で特徴的だったものであり、ニュースの背後で音楽が流されるということは、ニュース番組が娯楽番組に類似した手法を取る例と言える。
- 9) 一例として、ニュースにおける代名詞の使用に関し短期間で変化が生じたことが挙げられる。轟（2019, 2022）を参照されたい。

参考文献

- 加藤昌男（2012）『テレビの日本語』岩波書店。
- 木下是雄（1990）『レポートの組み立て方』筑摩書房。
- 小林直毅（2009）「メディア／アーカイブ研究の展開へ向けて」日本マス・コミュニケーション学会編『マス・コミュニケーション研究』75、学文社、3-14。
- 小泉哲郎（1998）『テレビジャーナリズムの作法——米英のニュース基準を読む』花伝社。
- 中正樹（2008）「内容分析のすすめ——実証することの大切さ」小玉美意子編『テレビニュースの解剖学——映像時代のメディア・リテラシー』新曜社、26-37。
- 根岸裕一（1999）『新聞記事翻訳の現場から 和英翻訳ハンドブック』大修館書店。
- 高見健一（1999）「統語論 機能主義」西光義弘編『日英語対照による英語学概論』くろしお出版、137-183。
- 轟 里香（2007）「映像メディアで使用される言語の変化——英語学習者に対する影響」『北陸大学紀要』第31号、125-135。
- 轟 里香（2008）「ニュース番組で用いられる言語の変化について」『北陸大学紀要』第32号、121-133。
- 轟 里香（2009）「日英語における強調表現」『北陸大学紀要』第33号、101-108。
- 轟 里香（2012）「テレビのニュースにおける言語変化に関する一考察——映像アーイブを用いて」第85回日本社会学会大会報告、2012年11月4日於札幌学院大学（『第85回日本社会学会大会報告要旨集』）。
- 轟 里香（2013）「ニュースにおける省略と後置」『北陸大学紀要』第37号、169-181。
- 轟 里香（2014a）「テレビニュースにおける言語現象について」『北陸大学紀要』第38号、81-97。

轟 里 香

轟 里香 (2014b) 「テレビニュースにおける言語現象とその要因に関する一考察」 *Osaka Literary Review* 第53号、33-54。

轟 里香 (2015) 「ニュースで使用される言語における要点の移動について」『北陸大学紀要』第40号、41-53。

轟 里香 (2019) 「ニュースにおける代名詞の使用について」『北陸大学紀要』第47号、77-91。

轟 里香 (2022) 「テレビ番組における代名詞の使用に関する一考察」『北陸大学紀要』第52号、171-190。

(とどろき・りか 外国語学部教授)